

しらおか歴史物知りシート

No.2-3

こもれびの森・歴史資料展示室

【入耕地館跡と鬼窪氏】

白岡八幡宮と別当寺の正福院を結ぶ位置に14世紀から15世紀半ばにかけての館跡が見ついています。土地の小名を冠した遺跡名に合わせて「入耕地館跡」と名づけています。この館、白岡八幡宮との関係を考え、鬼窪氏の居館と推定しています。鬼窪氏の居館は、他に篠津久伊豆神社の南側に広がる中妻遺跡と、寿楽院や小久喜久伊豆神社の東側に展開する鬼窪尾張繁政館跡（南鬼窪氏館跡）が知られています。中でも、最も調査の進んでいる入耕地館跡を中心に3つの館と鬼窪氏のお話をしましょう。



篠津から小久喜付近の鬼窪氏の拠点と寺社・古道一覧

鬼窪氏は、中妻遺跡の鉄生産や日川・荒川の水運に目を付け篠津に土着しました。その年代は、遅くとも12世紀前半までだと考えられます。

これは、篠津久伊豆神社が康治元年(1142)創建と伝えていることや、建久6年(1195)に鬼窪某が頼朝の命を受けて白岡八幡宮の社殿の造営を行っていることなどから、12世紀後半には既に足場固めを終えていたと推測されるからです。

中妻遺跡の館跡は、調査面積が限られることから明確な規模や時期はわかりませんが、かなり大きな規模であると思われることと、少なくとも14世紀代まで存続していることがわかっています。

入耕地館跡は、14世紀から15世紀半ばまで継続した館跡です。「観応の擾乱」の折、鬼窪氏は足利尊氏方について参戦したことがわかっています。「高麗経澄軍忠状」(町田家文書)には「鬼窪にて旗揚」と見え、この場所こそ「入耕地館」だと推定されます。

鬼窪氏が、自らの館を旗揚げの地と

して提供した背景には、鬼窪氏が軍勢の中核を占める勢力であったこと、入耕地館が「鎌倉街道羽根倉道」に直結するという地の利、軍勢を整えるだけの館の規模と経済規模などがあつたと推定されます。

鬼窪尾張繁政館跡は、16世紀半ばから17世紀の館です。館に隣接する寿楽院の開基が元亀2年(1571)であることと合わせ、発掘調査による出土遺物との年代観にも齟齬はありません。繁政は、「尾張(守)」の官途を名乗る武将ですが、この時期事実上帰農したものと思われる。繁政は、誰に仕えた人物でなぜこの時期に在所に戻ったのでしょうか？中世史を紐解きながら鬼窪氏の動静を推理してみましょう。

年号	できごと・記録	内容
1351	観応の擾乱	足利尊氏方で参戦
1370	『空華日用工夫略集』の記述	鬼窪修理亮出家を願い出る
1439	永享の乱	関東管領上杉憲実、鎌倉公方足利持氏を討つ
1455	享徳の乱	足利成氏(持氏の遺児)乱を起こすが上杉氏等幕府側に追われ古河に逃れる
1456	鬼窪八幡宮鰐口銘文	康正2年にもかかわらず享徳5年の銘が刻まれている。
1487	長享の乱	扇谷上杉氏と関東管領山内上杉氏内乱
1489		古河公方足利成氏、嫡子政氏に家督を譲る
1518	足利政氏出家	甘棠院(久喜)へ隠居
1525	北条氏綱岩付城攻撃	太田資頼石戸に逃れる 岩付城は洪江氏に与えられる
1531	太田資頼岩付城奪還	洪江三郎討取られる
1538	国府台合戦	北条氏綱・氏康、小弓公方足利義明と合戦、菖蒲佐々木氏は小弓公方方として参戦
1546	河越夜戦	古河公方足利晴氏・関東管領上杉憲政、北条氏康に敗れる
1548		北条綱繁白岡薬師堂(正福院)に1貫200文の土地を寄進
1552	平井城落城	北条氏康、関東管領上杉憲政の居城上野平井城を攻略
1561	上杉謙信関東管領就任	上杉憲政、越後の長尾影虎を頼り、管領職を譲る
1571	寿楽院開かれる	開基鬼窪尾張繁政
1591	繁政没	

〇3つの仮説

応安3年(1370)鬼窪修理亮しゅりのすけという人物が、出家したいと義堂周信ぎどうしゅうしんに申し出ています。関東管領の上杉能憲のりと上杉朝房ともふさがこれを助けるために周信に頼んだり、鎌倉公方くぼうに報告したりしています。このときは上杉朝房が急遽上京することになり、結果的に出家は許されませんでした(後に出家しています)。

ここで注目されるのは、上杉氏との濃密な関係です。修理亮という官職は能憲が受けていたものでした。能憲が鬼窪氏の棟梁に名乗りを許した可能性もあると思われます。

また、現在長野県の北部に鬼窪姓が多いことも、このときのできごとと関係があるかもしれません。この時期朝房は信濃守護を兼ねており、急遽上京した原因も善光寺の栗田氏の蜂起でした。上杉氏が信濃守護を務めているのはこの時期だけです。朝房が有力な配下を現地経営のために差し向け、その中に鬼窪一門の人物がいて土着したと考えても全く不思議はないでしょう。

鬼窪氏は、上杉氏配下の武将として手腕を振るっていたのではないかと考えられます。

やがて、河越夜戦かわごえで古河公方・上杉連合軍が北条氏康に敗れ、上野へ逃れ、さらに越後へ逃れる間に、上杉氏の求心力が次第に薄れ武蔵武士の離脱を招いたといわれています。

こうした流れの中で鬼窪氏も上杉の下を離れる、しかし新興勢力の後北条の軍門に下

ることを良とせず帰農したのだとすると、16世紀半ばの鬼窪尾張繁政館跡の新設は説明がつかず。

〇それでも残る謎

謎1：白岡八幡宮わにぐちに伝わる「鬼窪八幡宮鰐口」には、享徳5年(康正2年・1456)の銘があります。古河公方一派が改元を受け入れず、享徳年号を使い続けていたことは知られていますが、関東管領方の鬼窪氏がなぜ享徳年号を使ったのでしょうか。15世紀半ば、既に菖蒲佐々木氏や古河公方足利政氏の圧力が強まっていたということでしょうか。

謎2：1548年北条綱繁という人物が白岡薬師堂(=正福院)に寺領を寄進しています。綱繁が綱成だとすると、河越夜戦で上杉方を退けた玉縄北条氏の北条綱成ということになります。その綱成が、鬼窪氏のお膝元の正福院になぜ土地を寄進しているのでしょうか。

折しも、繁政が帰農する時期と符合します。「白岡」はすでに北条方の手にあり、止む無く隣の「小久喜」に新しい館を築いたということなのでしょうか。

戦国期の白岡周辺は、古河公方と菖蒲佐々木氏、さらに岩付太田氏いわつきと後北条氏などの勢力争いの只中にあり、鬼窪氏は厳しい状況に置かれていたことは間違いないでしょう。

鬼窪氏や鬼窪郷に関する情報は少なく、想像をたくましくするほかはありません。学芸員も戦国期を生き抜いた鬼窪氏に敬意を払い「一所懸命」に推理してみました。